

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	20 / 2006 / 42-47
タイトル	ふるさと雪形探訪Ⅲ 日本一 雪形の棲む岩木山
著 者 名	室谷洋司

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

《ふるさと雪形探訪Ⅲ》

日本一 雪形の棲む岩木山

第10代 室谷 洋 司

1. 岩木山に躍る動物絵図

岩木山は「雪形の棲む山」として文句なしに日本一。—これは、日本の雪形を集大成した田淵行男が著書「山の紋章・雪形」(1981年)で絶賛したことばで、さらに続けて「雪形が見られる山は全国に130座以上あるが、岩木山が24体で二番の二王子岳(新潟県)の20体を大きく離している。津軽富士と呼ばれるこの秀麗な成層火山は、適度な陰影と彫刻がほどこされ津軽一円が観客席。雪形が多いのも十分うなずける。」と。

私の雪形調査は田淵への協力がきっかけで、著書の出版時点で24体だったのが、その後の調査でさらに増え30体を上回っている。

「白神岳編」でも書いたが、雪形とは山の雪が消えるにしたがって現れる残雪の形状。子供の頃に雲を見上げさまざまな動物の姿を連想したように、残雪模様も色々なモノに見える。しかし、これだけでは雪形とはいえない。伝承がはっきりし、それらが農作業の目安にされていて、ふもとの人たちが「昔、お爺さん、お父さんからよく聞かされた。」などの証言が欲しい。

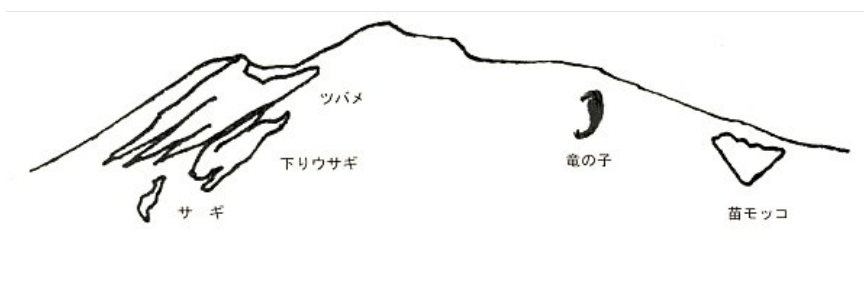
岩木山の場合、菅江真澄の日記「錦木」(1807年)に、「岩木山…白狗、斑犬、長鋤、股鋤、植女、飛竜などのかた、あらわるなり」と雪形の伝承を記録し、津軽の民俗を調べた内田邦彦は、「津軽口碑集」(1929年)に、「残雪の形によりて耕作の時期を定むる事は津軽にもまたあり。春の土用の十五日前にも残雪は岩木山の中腹に兎の形に見え、さらに十日を経れば牛に変じ、なお十日経れば馬に変わる。」と、農事暦の役割を記している。



[写真1]「苗モッコ」「下リウサギ」が現われ、田植えの準備に追われる。「ツバメ」や「サギ」を見て忙しい季節を実感する。25年前の手植えの田植え風景(1980年5月18日、元薬師堂)



[写真2] 数日たった「下リウサギ」「ツバメ」などのアップ。

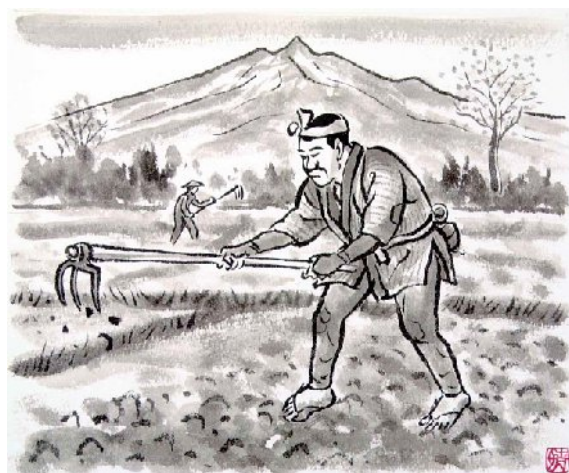


[図1] 雪形を示すイラスト

雪形の“生き証人”を訪ね歩く

津軽各地の故事に詳しい人たちに教わりながら、実地調査に入ったのは1980年のことであった。今から25年前の当時は生き証人が、まだ農作業に精を出していた。

その年の5月中旬。弘前市郊外の高杉地区に住むKさんから、「よく見えてきましたよ、すぐ来てく



[図2] 昔のひとは雪形を見て農作業をした(山口晴温・画)

ださい…。Kさんは明治38(1905)年の生まれで、老人クラブの会長さん。かくしゃくとしてオートバイで田圃やリンゴ園を見回っていた。Kさんは田圃のあぜ道に座って、山を指さしながら雪形の話をしてくれた。

「あれが上り犬です。岩木山の頂上部が頭で、右に向かって大きな口を開けているでしょう。下の方が胴と後足になるんです。その下の、中腹の大きな沢に下りウサギが見えます。ずっと右手の沢に苗モッコがもう出ています。あのモッコに苗が二つ三つ入ると、昔は田植えを始めても良いといわれたものです。」

残雪が描く動物や農具の雪形は、なかなか理解がむずかしい。Kさんはスケッチブックに鉛筆でこれらの輪郭をなぞってくれた。じっと山を凝視する。やがてほかの余分な雪は視界から消え、「上り犬」と「下りウサギ」の二つだけが、犬は天に吠え、ウサギは山麓めざして疾走する姿となって像を結んだ。

元薬師堂地区では、もう一人のFさんから「上り犬」「下りウサギ(白ウサギ)」「サギ(アマサギ)」「ツバメ」などを教わった。「上り犬」と「下りウサギ」は岩木山頂上から東南斜面に現れる巨大な雪形で、形がよく整うかどうかは、その年の雪の消え方が大きく左右するという。「上り犬」は豆蒔きとか山菜採りの目安。「下りウサギ」は田植えの準備を教えてくれる。「ツバメ」は岩木山の鳥海山南側斜面に現れる見事な雪形で、胸と翼が分離して完成すると、すいすいと滑空する姿に見える。

残雪の季節。岩木山は津軽の人たちには巨大なキャンバスで、動物絵図が一斉に躍り出す。場所を変えて別の地区に行くと違った雪形がふもとの人たちに微笑みかける。

名 称	類別	出現位置	伝 承	望見地域
上り犬	○	岩木山頂上から東南斜面の沢	豆蒔き、タケノコなど山菜の適期	弘前市高杉
下りウサギ (白ウサギ)	○	岩木山頂上から東南斜面の沢	田植えの準備	弘前市中心部から高杉、板柳町ほか
サギ (アマサギ)	○	岩木山東南中腹の沢	田圃にサギ飛来時期を想起、サギの足消えでタケノコ盛期	弘前市中心部から元薬師堂、藤崎町ほか
ツバメ	○	鳥海山南側斜面	最初は胸、翼が接続、やがて分離。形明瞭でタケノコ最盛期	弘前市中心部から高杉、藤崎町、板柳町ほか
牛クビ	○	鳥海山頂から南側斜面	お岩木さまにベゴ(牛)がいるの意	岩木町、相馬村
鯉の滝上り	○	鳥海山中腹の沢	田植えの準備	弘前市国吉
竜の子	●	岩木山東側斜面の尾根	形状の推移で農作業	弘前市各所

[表1] 岩木山の雪形1 (「動物達の躍動」。主な雪形を表に整理。類別の○は白く見える、●は黒く見える)

2. 岩木山は農事暦の役割

「あれがベゴ(牛)の首だネ! ビロ(涎)垂(た)らしてるべ!」—これがNさんの開口一番であった。

1980年6月、弘前市相馬地区のリンゴ園。作業小屋の前に坐って休んでいる年配の人を見つけた。雪形の話しを聞こうと、「こんにちは!」と入っていったが、かたくなに口を閉ざして話しに乗ってこない。マヂ(都会)の若者などと話しても近代農業の今では無駄だと、内心感じていたようだ。

私は、青森市郊外の田舎育ちで津軽弁は流ちょう。世間話に始まって、祖先の知恵を大切にしたいという気持ちを熱っぽく伝えた。

やがてNさんは饒舌になった。ベゴの話しのあと、やおら立ち上がって岩木山の中腹から頂上を指さした。そして今度は、腰をかがめて苗を取るしぐさを始めた。「上がネドリジッコ(苗トリ爺)だネ。その下にネソリババ(苗ショイ婆)いるべ。」

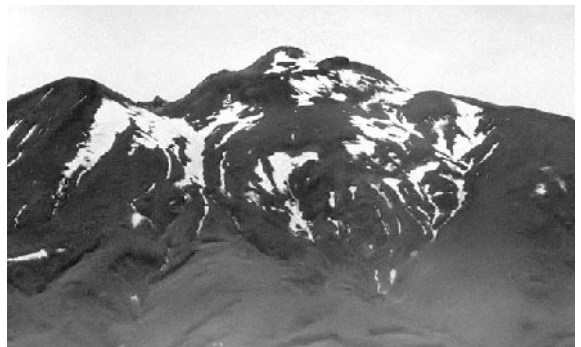
お岩木さんは、爺さんが苗を取り婆さんが苗を背負って運ぶ、猫の手も借りたい田植えの最中を教えていた。Nさんの表情は嬉々として、昔の仕事をしみじみとかみ締めているようだった。機械が人馬に代わった今日、まわりの田圃は青々と苗が伸長し、人っ子一人いない静けさ。極端な今昔のコントラストの中で、Nさんの思い出話はとめどもなく続いた。

安永5(1776)年に、南津軽郡田舎館村の中村喜時が著した「津軽耕作噺」という農書がある。北国の厳しい気象環境のなかで、稲作の栽培管理を記している。

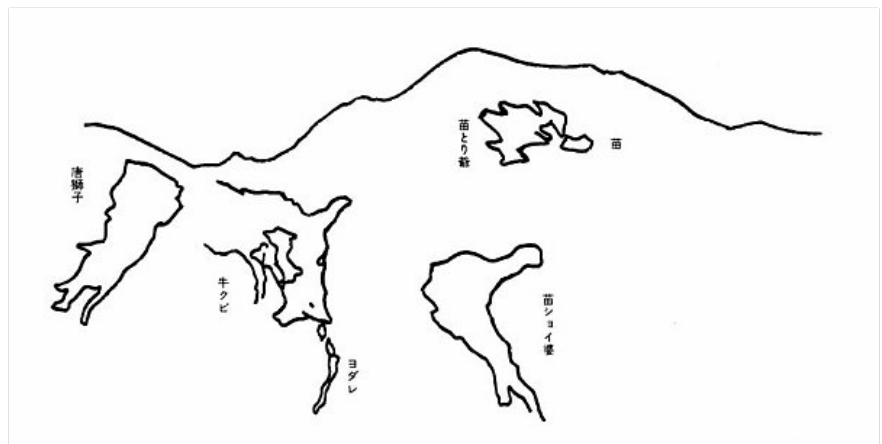
要点は、①俗に暑さ寒さも彼岸までで、3月21日頃に種モミを水につける。②八十八夜に苗代に種をまく。立春から88日目まで霜が少なく、5月2、3日頃に当たる。③春土用。4月17日から5月5



[写真3] 山頂のすぐ下に「苗トリ爺」、その左下に「苗ショイ婆」が現れると田植えの季節。左手・鳥海山斜面には「牛クビ」、その左には「ダイコン」または「唐獅子」も見える(2001年5月29日、湯口)



[写真4] 数日たって岩木地区寄りから眺めると、より鮮明に見えた。「牛クビ」はヨダレをたらし、「唐獅子」が左を向いて踊る(1980年6月1日、岩木)



[図3] 雪形を示すイラスト

日頃までに水田を起こす。④ 6 月 11 日頃に梅雨の雨によって田植え。⑤秋彼岸に稲の刈り取りを始める。これが昔の豊作のシナリオであった。

別の地区では違った雪形

今の田起こしから田植えまでの一連の作業は極度に機械化され、ほぼ 5 月いっぱい終わってしまう。しかし、先の世界大戦終戦のあたりまでは、昔の田仕事の原型が岩木山を見渡すほとんどの地域に残されていた。弘前市相馬地区の明治生まれの T さんは、つぎのように話してくれた。

「私たち若いころは、田打ち桜(コブシ)が咲いてくると田の一番打ち。三本鍬で打つんです。前の年の株を三つずつ盛りにして、土を良く乾燥させ、肥料分も分解させる。そして弘前の観桜会でちよつとひと休み、思いっきり楽しむんです。



[図4] 猫の手も借りたい田植え作業(山口晴温・画)

この後、二番打ち三番打ちとやって、平らになったところで田コナシ。土を細かく叩くんです。つぎに水を入れて鍬でトロトロとかまして田を掻いでいく。粗(あら)シロをやって植える間に代カキ、最後にエビリでならして田植え。ここまでくると新暦ではもう 6 月です。旧暦だと 5 月ですが…。」

ことしの津軽の野づらは、遅かった桜祭りが終わっても、田圃はそのまま放置で隔世の感があった。

前に述べた N さんは、「唐獅子」の雪形も教えてくれた。これは岩木山の南側斜面に現れる巨大な残雪で、元薬師堂など弘前市の北寄りからは「ツバメ」に見え、角度が変わって岩木、相馬地区あたりでは「ダイコン」とか「唐獅子」になる。

どういう意味を持つのですかの問いに、「唐獅子はおめでたいときやってくるでしょう。農家は幸せな暮らしが一番なんです。」

岩木山はこうのように、ふもとの人々にありとあらゆる、心のよりどころを与え続けているのである。

名 称	類別	出現位置	伝 承	望見地域
苗トリ爺	○	岩木山東南側の中腹付近	田植えの目安	弘前市南西部
苗ショイ婆	○	岩木山東南側の斜面	田植えの目安	岩木町、相馬村
苗モッコ (苗ショイモッコ)	○	岩鬼山北東面大石の沢	田植えの準備、モッコの中に黒点(苗)が一つ二つ入ったと田植えに入る	弘前市中心部、藤崎町、板柳町ほか
唐獅子	○	鳥海山南側斜面	唐獅子が踊っておめでたい。「ツバメ」「ダイコン」の別角度	岩木町、相馬村
ダイコン	○	鳥海山頂の南側斜面	作物のダイコンが見えた	岩木町、相馬村
四つマナコ	○	岩木山北側山麓の奈良寛池南側	農作業の目安	弘前市鬼沢地区

[表2] 岩木山の雪形2 (「農事暦」。類別の○は白く見える)

3. 季節のシグナル「苗モッコ」

急げ急げ、田植えを急げ

お山のモッコさ、苗(ね)コ入った

「岩木山の大石の方角に、苗を背負って運ぶモッコの形に残雪が見えると、田のあらくりにかかる。そしてモッコの下、雪が消えて黒く見え、ちょうど苗が入ったようになると田植えにとりかかった。その時分になると村の子供たちは、このように唱えながら村中を歩いたという。」

一津軽の民俗を研究した森山泰太郎は、「津軽の民俗」(1965年)に「苗モッコ」をこのように書いている。

これまで、岩木山の雪形についてさまざまな動物のかたち、あるいは農作業をする爺さん婆さんの姿を見てきた。それぞれが狭い地域からの見立てで、土地の人たちにはかけがえのない季節のシグナルであった。

ところが、「苗モッコ」は、頂上から山麓にかけて無数にある沢合いの、たった一か所の小さな逆三角形の残雪にすぎないが、津軽地方の農作業の目安としてすこぶる重要なものであった。田圃やリング園をまわり年配のかたがたに取材を続けてきたが、ほとんどの人が「苗モッコ」のことを口にした。

これは第一に、「苗モッコ」の見える範囲がすこぶる広く、弘前市の中心部から鶴田町あたりまで約90度の観客席をもつ。第二に、かたちが単純明快で雪が消えたあとの黒点が1個、2個と誰にでも分かりやすいのである。

雪形撮影に青森市から出かけるが、まず青森から西方を見やり岩木山の晴れ具合を確認する。何とかなると決断して特急電車で瞬時に弘前駅頭に立つ。ビルの中に「苗モッコ」が顔をのぞかせているとひと安心。その日の成果が約束され、観測地点に決めている元薬師堂地区に急ぐ。

その年の稲作に備える

2001年の「苗モッコ」の推移を記録した。5月10日頃までは真っ白で13日になって黒く苗一つ



【写真5】田起こしの頃の岩木山。右手大石の沢の上に逆三角形の残雪が見え、ここに「苗モッコ」が現れる。(2001年5月4日、元薬師堂)



【写真6～8】「苗モッコ」の移り変わりを記録。上・「苗モッコ」に苗が一つ入り始めた(5月13日)、中・二つ入った(5月18日)、下・三つ入り(6月2日)、田植えの最中を教えている(いずれも元薬師堂)



[写真9]「苗モッコ」の実物



[図5] 岩木山をじっと見つめて農作業の手順を考える(山口晴温・画)

が入り始め、5日たった18日に2個が入った。撮影はこれからが大変。昔であれば、季節は田起こしの最終段階でまだ水を入れていない。ところが今の機械化農業では猛スピードで田植え完了。5月の下旬ともなれば水蒸気が大気を満たし岩木山が見えなくなってしまう。「苗モッコ」に苗が三つ以上入ったのは6月2日以降で、うっすらとした山肌にその姿をとらえることができた。

最初に紹介した森山氏はさらに、「田のあぜ道に立って岩木山をじっと見ているお年寄りがいるんですよ。今の人たちは何を見ているんだと不思議がりますが、実はモッコに苗が入ったなどと、山の移り変わりを見て農作業の手順を考えていたんですね」と話してくれた。

田植えは1年のうちで最も疲れる厳しいものだった。それを吹き飛ばすような一族郎党が総出の祭りのような賑やかさ。出来不出来が生計を左右し、農家は命をかける。自然にまかせっきりの昔の農作業は、早く植えすぎても、霜にやられたり病害虫への抵抗性をなくする。遅い作業では、夏場の成熟期を逸して作柄が落ちてしまう。「お山」に向かって拝むように見つめる人たち。豊穡の秋を祈るその心情には、身にしみるものがある

田植えどきに唄った子供たちの「急げ、急げ」の旋律は、記憶のかなたに遠ざかってしまったが、岩木山の「苗モッコ」は毎年、同じところに現れ年々の気象の早い遅いを教えてくれる。農業の指導機関が配布する「水稻栽培ごよみ」に頼りきり、日曜農業も可能な現代ではあるが、「苗モッコ」をも見て、その年の稲作に備えたいものである。

(2006年4月1日記)

引用文献	菅江真澄	1807、錦木(雑葉集)。
	内田邦彦	1929、津軽口碑集。
	中村喜時	1776、津軽耕作晰。
	森山泰太郎	1965、津軽の民俗。